

林芙美子の戦後作品における〈雨〉の働き

—『浮雲』を中心に—

王威鈞

要旨

林芙美子の戦後作品において〈雨〉という要素を戦争と同時に物語に取り入れることが数多く見られ、彼女の最晩年の傑作『浮雲』はその適例である。『浮雲』における〈雨〉が全篇を通して用いられる符号であり、物語において重要な元素だと考えられる。

本稿ではまず、先行研究を踏まえながら、『浮雲』における雨の場面と主人公たちの心境とのかかわりに着眼し、〈雨〉の働きを考察した。その結果、〈雨〉は「厳しい現実」「ゆき子と富岡の関係の悪化」「死と生のしきり」を示唆すると考えられる。このように〈雨〉が好ましくない場面でよく使われ、主人公にとって「お伽話の世界」の仏印とは合わないため、〈雨〉は滅多に仏印とかかわって記されていないのである。また、林芙美子の短編小説「雨」における〈雨〉の分析と対照し、両作品の〈雨〉が厳しい現実を示唆する働きが一致している一方、同じく死と生のしきりを示唆するが、富岡の求めた再生は孝次郎より消極的である。その理由は、両作品の主人公が未来に対する態度の違いによるものだと推測し、今後の課題として掘り下げてみたい。